

七比びんにえつ
徳上人

生 真

第五卷 第九月號

△靜に世人の離合集散を見るに、其の來たるところ主として其の人の私利私慾に基く。されど眞人の求むる生活は決して私利と私慾との生活ではない。

△十年の友も、己が一時の私慾により、或は一時の利害から、永劫に別れねばならぬ人がある。乍然、友よ、我等はかゝる愚かなる誤りを避けねばならぬ。

△キリストは汝の敵を愛せよとさへ云つた。十字架の彼は即ち其の實行の相である。彼は彼を十字架にかけた人々を神よ彼等を許し給へ、彼は其の爲すべき所を知らざればなりと、十字架の上から祈つてゐるが何と云ふ壯嚴の祈りではないか。

△されど佛も佛心とは大慈悲これなりと示された。成佛を目的とする佛敎は邪心邪慾は禁物である。自ら佛を求むるもの、何で我慾であり得やう。友を許し、人を許し、一切を愛するのが即ち道を求むるものゝ態度であらねばならぬ。

△然に多くの人々はともすれば口に信仰を稱へつゝ、そのうちに自ら邪慾の人となり、或は善友を罵詈雑言し、私利と私慾とに没頭して自ら辱ぢない人さへある。乍然かくの如きは未だ眞の眞人でない。それらは信仰を看板に私慾を貪るの餓鬼である。

△されば友よ、自分に眞に信仰を求むるならばいつも自分の心がどれだけ如來を中心として慈悲の心に動くかを見よ。そこに其の人の信仰の深さを見る事が出來よう。

△我等は自らの罪を懺悔して、一切の人を許すとき、反て自己の安らぎを得る。人を許さずば己れも又許されず。人を許し、人の爲めに計るとき我等は人知らずとも喜び内に充つるを知るのである。(念)

目次

◇私の生命観

土屋 觀道

◇我ものとなつた宗教

土屋 觀道

◇如是我觀

佐藤 忠義

◇吾友便り

私の生命観

土屋 觀道

私のこゝ二十年は一途に人生問題に没頭して來たと云つてもよい。人は何故に死すべきか、我等は永遠の生命を求む人生の意義何所にありや、宇宙と人生との關係は如何に、神とは何か、佛とは何か、之等と我等の關係は如何と是悉く私の思索研究の中心であつた。

従て私の云ふ生命観は單なる生物學的生命に就てははない。それに就て私は生者必滅と云ふことを少さい時から聞された、然し私がこのことに本氣になつたのは漸く二十歳になつてからのことである。人は何故に死ぬるか、我は死ぬのがいやである。此の肉身の死と共に我が死ぬと云ふことは何と云ふ恐しい事だらう。我は死ぬのがいやである。我は永劫に死を望まない。何とか死なき工夫はないかと。然し考へれば考へるほど生者必滅の道理は益々明かな事實である。それは私ばかりの事實ではなく、生として生けるものゝ凡てである。加之宇宙一切の現象は一として常住なものはなく、皆悉くが無常である。天も地も月も星も山川草木一として常住なものはない。従て我が父母、妻子、兄弟、親友も早晚死ぬ時が來る。

而て誰人が眞に死なき人があらうか、生あるものは必ず死ぬ、それが此世の定である。而も之程吾人

△大阪眞生同盟會より
さて大阪眞生同盟會も來るべき秋より着々普及運動にうつるべく水曜日委員會で萬場一致で決しました。そして會員一同その爲に努力をしまない筈で御座います。それにつきまして御上人の御講演は布教にもなるべく能率的に有効に今迄の如き當地に於ける如く餘りに場所的に分散的なりしを集中しまして有効に時間的並に場所的に及だけ御上人の御身體の疲勞を幾分なりともやわらげん爲集中主義を以てせんとこの事と相成りました。九月には大軌のホールも出來る事ですから一同の努力の効が正に眼前に現る事と存じます。

尙それにつきまして文書的にも普及宣傳致し度き委員會の決議有りましたのでパンフレット式の極く頁數の少い文書を出版して配布致し度いと一同の議決でした。

小生も今暫く暇が有りますので努力致す事を誓ひまして近々より雜誌眞生の表紙の部分の筆寫を爲す事を依頼されました。他方眞生中の最重要なる御上人の論說主義をパンフレットとして來るべき秋より配布致すべく計畫が御座います。御上人の方でも御意考が御座いませうが一同選擇致しまして御上人の御許しを願うた上の事と致す心算です。

又御上人の御努力を尙一層有効にせんが爲大阪のものゝ内にも口舌に或は筆に才能を有せらるゝ方々が多いのですから今後大に努力するこの事で小生も大に盡力をおしますに努める考へで御座います。(八月七日) 奥村生。

にとつて心から淋いものはなく、亦痛ましいものはない。死が襲ふとき誰とも別れねばならぬ。そしてそれがまた再び會ふ事が出来るものならともかく、恐くは又と會ふ期會は永劫にないかに思へる。而もかうして毎日親しく暮してゐる相互がいつかは悉く死なねばならぬと云ふ事は何と云ふ悲痛な人生であらう。而もさう云ふ自分も死ぬのだ。否現に刻々として我等は等しく死の門に運ばれつゝあるかに見ゆる。而も人生は僅に五十年之を天地の悠久に比ぶればまことに夢幻しの如くである。

仰いで宇宙の宏大を見よ、其の時間に於て、その空間に於て、如何に無限にして又無邊なることよ。宇宙は永遠より永遠に止む時がない。我等の人生如何に長しと雖も、この宇宙の無窮なるに比ぶれば其の短きこと實に一瞬の間である。今より百年の後、我が一生を顧みば、恐くはそこには自己の片影だに見えぬであらう。而して我が妻子兄弟も亦同様ではないか。かくて我等の前途には唯悉く死あるのみ。富めるも貧しきも、強きも弱きも、男女老若を問はず、一人として此の世に永存するものはない。春秋永久しいに繰り返せども人と云ふ人の一生は一度過ぎてまた歸らず。靜に廻る宇宙の真相を觀すれば逝く春來る秋また一として眞に昔に歸るものとははない。然に世間の人々は多くはかゝる事實を知らぬ有様である。尤も近親者の死を見ては之を悲しむ人も無いではない。乍然月夜に過ぎ近く自己の人生を心から悲しむ人のないことは何と云ふ驚くべき現象ではないか。

而も世間の當相を見るに、世は悉く修羅鬪争の巷である。弱肉強食、生存競争は到る所に展開されてあるかに見ゆる。

或る人は云ふ「生きる爲めには食はねばならぬ。食の爲めにはまた戦も止を得ぬ。食なくしては生き

て行かれぬからである」と。

これ又一理あることではあるが、乍然人は食のみが人生ではない。又食さへあれば人は永久に生きらるべきものでもなからう。食ふても食ふてもやがては死ぬるが人生ではないか。

二

死の前には一切が絶望である。財も名譽も生あつてこそ用もなせ、我等の住める地球も亡び、我等を照す太陽も滅する時我等の前途は絶望である。而も吾人は更に永生を求めて止まぬ。云はゞ不死の世界、常樂の天地を求めて止まぬものがある。生に對し喜びを感じ、死に對して恐怖を感じるはこれ生物の常である。されど人生の惱みが死を知ることによつて更に一層に増すことは之又自然と云ふべきであらう。而して今日の吾人は一時の死よりも永劫の死を痛み、一時の苦よりも永劫の苦を歎く。茲に於て古來の聖賢が一生を通じて、永生の道を求め、苦難を凌いで向上の一路をたどつたのも、亦無理からぬことと云ふべきである。然にこの世は無常にして、一として常住のものはなく、生ある者は必ず死ぬかに見ゆるのが、此の現實の有様である。乍然私の心は常に淨樂の世界を求め、常に永生の光を求むる。

乍然かくの如きの要求は數千年前、己に印度の聖賢によつても求められたる所であつた。佛典によると釋尊は「此の世に常住なものはない、この世は悉く無常生滅の世界である。而も常住の我もないのである。故に吾人は此の諸法の眞相に従つて、一切の愛着を放棄し、總ての利慾を捨つべきである。其の時自ら眞如法性の妙諦は顯現して、涅槃の境に入るのである」と示された。然に此の釋尊の説法は當時の外道バラモンに比ぶれば確に一つの達見であつた。

當時印度のバラモンでは「我は本來宇宙と一なる者、宇宙大我の分身であつて、本來清淨なものである。然に此の肉身の爲めに私慾をかいて本然の自由を失つてゐる」と。云ひ、そして、此の苦界を脱するに禪定を修して肉我の放恣を抑へ、自己本然の寂靜に歸らうとするものと、此の肉我の要求を極度に制して淨樂の涅槃に到らうとするものとの二派がある。世に前者を修定派と云ひ、後者を苦行派と云ふのがそれである。然に釋尊は其の初め此の二派について學ばれたが後には得る所なしとして捨てられた。其の理由はバラモン係の宇宙觀は轉變説に依つたものでその解脱の方法も又此の説から割出されたものである。故にかくの如きの修行法では肉體の存續する限り眞の解脱は永劫に得られないと云ふのが釋尊の見解であつた。

然るに釋尊の所觀は何であつたか、それは諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三つであつた。然を凡夫は之を無常と知らずして、常住と執し、自己を無我なりと知らずして我なりと愛する。そこに天地の自然に反した惱みがある。無常を無常と見、無我を無我と直知してそれによれば一切の妄執愛着を脱す。其の時一切の苦難は離れて、正に眞實の涅槃に入ると。之が釋尊の見解であつた。

三

乍然一般の人々にはかうした教へもさう簡單には判らない。諸行が無常であると聞かされても尙肉身に執着してそのまゝ永劫にあるかに考へ、諸法は無我と説かれても、我他彼此の見解は一時に散するものでもなかつた。否むしろ斯る説よりも、我等は永生の自己であり、常住の眞我であることが本來我々の望みであつた。だから多くの人々は反て無常を聞かれて苦しさを感じ、無我を説かれて不安を感じた

ものさへもある。否今日の吾人と雖も折角生れし此の現實の世界を離れ、折角親める懐かしき親子、兄弟、夫婦、親友が死に別れると云ふ事は無常は無常と云ひながら決して喜ばしいことではない。又如何に無我なるが故に我他彼此の見解を捨てよと教へても、それによつて更に高次の永生の道が知られずは吾人は決して之を捨てられぬものではあるまい。否たとひ釋尊の教へとして、諸行無常、諸法無我の教にて、涅槃寂靜の天地が眞に示されずば決してそれに趣く人としてはない。凡夫が無常を常住と愛着し、無我を有我と執着するの、要するにそれは自己本心の永生の光と向上との天地を求むるの變形に外ならぬ。されば吾人をして眞實の道に入れしむるに世間の無常を説くと共に涅槃の常住を説かねばならぬ。而て自我の執着を破るには諸法の無我を示すと共にそれが眞生の天地に生きるの道を説くべきでないか。本來衆生無我ならばそこには迷ふ我もなく、悟を開く佛もなからう。迷悟の我がないならば輪廻の我もない筈である。

加之、佛者の一派は何事によらず、現世を否定してあくまで此の世を捨てしめやうと教へるが、之また誤まつた教へでないか。人飢えて食を求め、人長じて異性を愛す、これ必ずしも絶對に罪すべきものではない。或は父母を敬い、朋友を信じ、兄弟相睦み、夫婦相和すること又以て捨つべしとは言はぬであらう。子を持つて子を愛し、眞理を見て之を喜ぶも悉く此の世の願いの一つではないか。善を好み惡を惡み、醜を厭ふて美を望むのも、今世に於ける體驗の要求である。我等は現在にあきたらぬものがあるからして、現實の凡てを捨つるといふことが果して眞實の生活であらうか。或る人は云ふ理想の起りは現實にあきたらぬところより來る、故に理想はいつも現實に對して未來にあり、現實は常に理想に對して否

定せらるべきものであらねばならぬと、而て淨土教徒が此世を否定し、偏へに來世を望むのは亦此の道理によるとするものである。乍然、かくの如きは只一往の論理であつて、再往之を論ずれば眞實の理想は現實を離れてあるものでない。一切は現實より出發して現實に歸る、過去も未來も一切は現在を離れて何ものもない。されば吾人が現實に即して現在より永遠に生き、今世より未來を通じて無限に向上しやうとすることはあながち迷妄とのみは言へぬ道理がある。

四

私は初め無常といふことが悲しくてならなかつた、それは之によつて一切の愛する者と別れねばならぬからである。そしてまた私には無我といふ事が信せられなかつた。それは之によつて、自分を、又私自身が永遠に生きられないやうなこゝちがするからであつた。そして諸行は無常でも一家は永遠に榮む、一國は永久に發展せんことを望んで止まず。諸法は無我でも我のみは常住であり不滅であつてはしかつた。而て此の現實と理想とが互に私をして眞に限りなき苦悶に導いた。

斯くて私の考察は自己を尋ねて、其の本源を宇宙の本源にまで尋ね入らしめた。我は何處より來りて何處に去つて行くものぞ、生と云ひ死と云ふ畢竟それは何者であるか。我が身心これを以て我とすべきか、それとも眞實の自己はそれ以外にあるか。かくの如く考へ、かくの如く一切を觀じつゝあるものは何ぞや、而してその者の本源また何處にかある。斯て一方には宇宙の本源を尋ね、又宇宙の現象を觀る。宇宙は宏大にして無邊である。一切の萬法も此中にあり、一別の現象もこの顯はれである。萬法と宇宙は本來一なりや別なりや。宇宙と萬法との關係は如何、かくて萬法と我との關係を觀、我と宇宙との關係を觀る。我と宇宙とは一なりや別なりや、宇宙なくして我ありや、宇宙は我の中なるか、我れが宇宙の中なるか、萬象の中の一員として我を觀れば我は確に宇宙の一員である。されど我に影じたる萬象を觀れば宇宙も我の中にある。而も我が心に寫る宇宙の宏大にして無邊なることよ、靜に天體の渾行を見れば其の廣き事實に宏大にして思想を絶し、其の久しきこと實に又其の考察を絶す。而も星のまたき月の面影、旭の光、或は山川の雄大なる、草木の美麗なる。時には莊嚴を覺え、時には親しみを覺ゆ。而も此の間無限の力と法則は之等の一切に充ち満ちて、互に恵み恵まれて、春夏秋冬何ものかを語るに似たり。此の間喜々として喜ぶ鳥もあり、虫もあり、犬もあり、猫もある。其他小兒の無邪氣なる、又釋迦孔子キリストの之等を讚美せる世界を見ては此の世必ずしも暗黒の世界とは見られない。而て之等の世界、之等は宇宙の一部である。宇宙は萬象の總體であり、本源であり、又一切の生命である。萬法の流れて止まぬは宇宙の活動して止まぬ相ではないか、我等が死を厭い生を望むは宇宙生命の然らしむる所でないか、されば我等の生も死も一切は宇宙現象の發展の相ではないか。宇宙は永遠より永遠に常に活動して止まぬ一つの活物である。我は此の中に生れ此の中に生く、一切の萬物も亦此の中に生じ此の中に生かされてゐる。宇宙は單なる現象ではない。其の中の萬象をたゞ無常なり無我なりと見ることは未だ宇宙その者の、常住、發展を見ざる者の見解を破る方便に過ぎず、要は天地の大道、宇宙の大生命を觀るべきである。我は宇宙の一員にして宇宙の本源より來る、一切の萬象又然るなりである。茲に於て我は宇宙と共に生き宇宙と共に發展す。宇宙の不滅なるが如く我も亦不滅、宇宙の發展せるが如く我も亦發展す。そこに我の永生あり、そこに我の向上がある。

茲に於て宇宙萬法の流れて止まぬ現象はそのまゝ宇宙の活動相であつて恰も流動して止まない水の相の如くである。而て波の起る根源に波の起る源動力があるやうに宇宙現象の根源に宇宙活動の源泉がある。而て此の宇宙活動の源泉が宇宙の外にあらざりて、宇宙其の者の中に内在してゐると観るのが佛教の見方である。宇宙の生命は無限の力と法則と慧みとを以て萬有の上に働いてゐる。其の働きが一面には萬有の發生となり、生長となり、發展となつて、此の宇宙の生命に統一せられ歸趣せられる。

されば宇宙の生命は一面には萬有の根源であり、中心であり、獨尊であると共に、又一面には萬有を攝取し、長養し、發展せしむる所の慈愛の源である。之を人格的には如來とし、或は佛といふ。法性といひ、眞如といふも亦同じである。

五

是を以て之を觀れば宇宙一切の現象は宇宙生命の發動であつて人類の發生及び其の生長も萬法と共に宇宙生命の生長發現の相なりといふべきである。然に翻て、我の中に宇宙を觀れば宇宙は悉く我の中にある。而て之等の中の萬象を觀つゝある者は何であるか、それこそ本當の我ではないか、身心をもてる我を我と思つたのも此の我である、乍然此の我は實に萬法を見つゝある我であつて、宇宙の中に見られつゝある我でなく、宇宙全體の上に一切を見つゝある絕對主觀の我である。而て其處には一切を觀つゝある我のみにして、何等の形も相もない。ウバニシヤッドの中に我は眼によつて見られ、耳によつて聞れるものではない、されど眼によつて見、耳によつて聞きつゝあるものがそれであると云つて居るが、正しく此の我を指したものに違ひない。而て今此の主觀我を宇宙の中の一員たる肉身の我としての我と

は果してどんな關係にあるのであるか。之は最も興味ある問題であらねばならぬ。

それは兎に角、今吾人は宇宙現象の中の一員として宇宙の中に存在し、而て又一切を自己の中に發見する。宇宙と我とは絕對に離すべからざる關係にある。

茲に至つて、吾人の身心は一面宇宙の一員として宇宙の大我に抱擁せられ、永劫不死向上の一路にあり、他面宇宙と一なる自己の本心は宇宙理想の表現として、自己の理想を此の土に實現せんとして自ら止まぬものである。茲に吾人の苦惱は頓に開けて歡喜となり、如來を中心とした不死の自覺は。永劫の光に充ちて、活動の源泉となる。

北越便り

今度北越の柏崎にも新に光明眞生會が生まれました。即ち眞生同盟發生であります。從來の光明主義の中のものともすれば幻影的享樂的になりやすい見佛派と離れて、現實より如來を中心として價値に生きやうと云ふ眞生主義の發生であります。此の地は故辨榮上人の有縁の地として、上人最後の説法の地、又上人臨終の靈地でありますが、上人の滅後ともすれば反つて教化の衰退をさへ見るの有様でありましたが、此際眞生の同志は北越を一體として更に新生の一大活動を試みやうと云ふのであります。されば北越各地の舊き道友はもとより更に全國の光明主義者も眞に提携して立つて戴きたいのであります。尙同じ越後見附にも今井善吉氏により、新に眞生光明主義の運動が發起されるやうになりました。

我ものこなつた宗教

土屋 觀道

近頃私は宗教と云ふものが漸く自分の者となつて來たと思ひます。さうしてそれが佛教といふ者であらうと、基督教であらうと或はそれが何教であらうと問ふ所ではない、要するにそれは自分に信ずることの出来るものであればよいといふやうになりました。いはゞ解放せられたる自由人の宗教とも申しませうか今や私共の宗教は他人の宗教ではなくして自己の宗教であればよいといふ事になつたのであります。否今や私の信ずる所にあれば眞の宗教は信ずる人その人の心に於て自分のものとしての宗教でなくてはならないと云ふことが始めてよくしつくりとして來たのであります。そして夫れが私以外に誰が信じやうと信じまいとそれはどうでもよいと云ふやうになりました。尤も宗教が普遍的のものであるならばそれはやがて一般の人々にも私と同じ味いとして信せられたの

であり又信ぜらるゝ時もあるのでありませう。故にかうした意味での普通の方面の宗教的味は私自身が眞に味ふ事の出来る者は又私以外の人々殊に世界的宗教の偉人たちには充分味はれて居る事であり、又それ以外の人でも眞に宗教に熱心なる人には必ず私と同じ味はれるものだと思ふのであります。乍然この事が果して眞ならば又是等多くの普通の宗教の眞理は私自身にもこれ等の宗教的偉人や其の他の多くの宗教的信者と同じく一樣に味はるゝものである筈です。従つて其の宗教的味は私自身の味いとなるべきであります。然は眞の宗教はかゝる意味に於ても、やがてそれは偉人の宗教であると共に又私自身の宗教とならねばならぬものでありませう。此の意味に於て私共はその初め多くの先覺の教へに従ひ、其の先覺のたゞられた信仰の道を私共自身にもたゞらうとするので

はありますけれども、それはやがて先覺者自身が何れも先覺者自身の宗教としてそれを味はれたやうに私共自身の宗教として眞に味ふやうにならねばならぬものです。

に申せば同一の信仰状態ではあり得ない者であります者を、何うして自分以外の人の信仰と全く同じなど云ふ事があり得ませう。

まして、眞の宗教は各人が各共通した方面と共にまた各異つた方面を持つやうに、必ずしも邊邊的方面ばかりを以つて宗教の特長とすべきでなく、各々其の異つた方面を包含し得る者でありますから、各人の宗教が各人とも全く同一の者ばかりではありませぬ。それは宗教の歴史を見てもよく此の事實を示してゐるのであります。或は同時代同民族によつて或る一つの共通した一種の普邊的方面がありますが、又其の時代民族の相違によつて自からそこにそれだけの差違も亦生ずるのでありますし、更に詳しくいへば各人各々其の個性の相違もあり、又同じ一人の上に見るも亦その人自身の環境の相違と云ふものが其の人の時處位によつて相違して行くものでありますから、恐らくは同一の型にはまつたやうな信仰はあり得ない譯です。然ば自分一人の宗教信仰でさへ之を嚴密

尤も宗教は其の人に於ては各絶對的の者である、従つて其の人の宗教は各々其の信仰の窮極に於て絶對の上に歸せられねばならぬ、其の意味に於て最も勝たる宗教的偉人の信仰は最も優れたる意味に於て私共の歸一の燒點とすべき意味に於て其の崇拜の一標準としやうと云ふ事は又必ずしも決して棄つべき事ではありますまい。假令其れが其れと致しましても、私達の信仰は矢張其の人の相應の自己の體驗以外に之をどうしても知る事は出来ない者でありますれば、如何にそれらの偉人の宗教を自分に學ばうと致しましても、決して其れは私共の力では出来る者では無いのであります。矢張其れは自分自身の體驗の範圍を越えることは絶對に出来ぬのであります。

して見れば結局人の信仰ではだめでありまして矢張其れは各人各位の自己の信仰の上に眞實の宗教は確立するものでなくてはならぬものであります。

す。こゝに於て私は結局自分の宗教は自分自身の體驗を中心として、自分の者となつた自分の宗教でなくてはならぬと感ずるやうになつたのであります。従つてたとひ其の宗教が偉人傑士の信仰だ宗教だと申しましても、其れが自分の信仰となり宗教となつて自分の體驗にまでならない間は其の宗教なり信仰では決して自分に眞の落ちつきは出來ないものであります。何となればそれは恰も人の金を無斷で預つて居るやうなものでしつくりと我が物となつていないからであります。従つて斯した意味から眞の宗教は自分自身の體驗の上にしつくり我がものとなつた宗教でなくてはならぬと云ふ事實を知る事が判るであります。

それに信仰と云ふものは其の人に於ける一つの體驗でありますから、さうした體驗の世界と云ふものは決して言葉や文章では發表する事は出來ないものです。其れは恰も音樂の世界や食物の味いと言葉や文章で幾ら表はさうとしましても、未だ一度も味つて見た事のない人には結局その想像も出來ないのと同じであります。従つて他人の信仰

と云ふ者は自分に何等の信仰的經驗のない人にはやつぱり之を想像する事も出來ないのであります。否假令一步を譲つて幸いにも其の人に此の信仰の經驗がよしあり得たとしても、他人の信仰と云ふ者は要するに自分の信仰的經驗を以つて之を言葉や文章の頼りによつて之を想像してゐるに過ぎぬのであつて、それは決して其の人と同一の信仰ではあり得ないのであります。然らば假令こゝに吾人は世界的の偉人を崇拜するとしても、其の偉人の宗教も要するに其の人各自の信仰體驗の程度以上には決して想像も得ないものであります。然らば結局宗教と云ふ者は何處迄も自己自身の體驗を深むるより外に仕方がないものであります。

茲に於て初めには自己の信仰に未だ充分の信賴がおけぬ爲めに主として、自らも偉人と信じ、若くは世間の多くの宗教的偉人と云ふやうな人々の言葉を中心として、そこに自己の満足し得べき多くの解釋をつけて、如何にも自分は其の人の教導によつて信仰を得た者かの如く考へたり、或は又自分は其の人の宗教と同じ信仰を辿る者かの如く

考へたり、時に甚しきに至つては未だ其の人が何處が眞に其の人の信仰であるかも知らず、又其の人の信仰が一體如何なる者であるかも知らずに知らぬくせに、まして甚しきに至つては自己には何等の信仰もなく、體驗もあり得ぬ人が、釋迦の宗教はかうだの、基督の教はあゝだの、法然はかう、親鸞はどう、日蓮はかうと各々其の僅の概念に如何にも承知し得たかの如く思つて居る人のあることとであります。

乍然世にこれほど驕慢で無智な者はありますまい。ところで今日の所謂宗教家と云はれる人々、若くは今日の多くの所謂信徒と云ふ人の十中の八九は殆んど悉くが此の部に類する人ではありますまいか。

それはともあれ、眞の宗教は何としても自分自身の信ずる事の出來るものであらねばなりません。たとひそれが釋尊の宗教若くは基督の宗教そのまゝでありましても、それが私の信ずる事の出來る者でないならば少くともそれは其の人の信仰でもなく、又其の人の宗教でもないのであります。

此の意味に於て宗教は今や自身に於て先づ信せられる者でなくてはならぬ。そしてそれが私に信せられ、體驗せられる事によつて、それは即ち私のもとなるのであります。此の頃私は始めて自分独自の宗教の味いといふ者が深められて來るのを覺えます。而て昔の多くの人達は眞の宗教といふ者をかうした意味に深く味ふてゐたやうであります。私も今やつと此の妙諦が心から味はれるやうになりました。(十五、九、六夜)

秋季 念佛三昧會 眞生同盟主催

日時 自十月十日 至同月十六日 七日間

道場 大阪府南河内郡石川村大字大ヶ塚 得生寺

講師 土屋觀道

場所は俗塵を離れた得生寺國寶大佛前、秋冷寂靜の靈氣に充ちたる所、全國道友の會集を望む。

申込所 大阪市天王寺東平野町 貞松院

如是我觀

一四

佐藤忠義

○我れ宇宙を觀するに無限と有限との世界あるを知る。無限界は時空を超へたる光明の世界なり、有限界は時空に限られたる無明の世界なり。有限界と無限界とは不離一界なり。宇宙萬有は無限の上の現象なり。

○有限界は我等の認識に現はれ、無限界は我等の認識以外の直覺に現はる。

○現象は夢の如く、化の如し、有限界は無限の澄水に映せる影の如し。

○無限に生なく滅なく、無限の實在動きて影を生ず、この影即ち有限、影に常住なく、有限は不斷に生死流轉。

○無限を稱して永遠の生命と云ふ、是れ無量壽佛國土、眞善美の都なり。有限、無限と一致すれば即ち淨土、有限、無限に反するところ即ち穢土、穢土これ偽惡醜の都なり。

○我が心、佛が住めば地獄も極樂、我が心、鬼が住めば極も樂地獄。

○我れ大宇宙の一員として、自我のうちに無限の我と有限の我とを存す。無限の我を眞我と稱し眞我は光明常住にして實體なし、小我は業の所生、無明無常にして實體なく實體あり、これ有限の我れ。

○眞我を自性とすれば、本來清淨、本來佛なり。小我を自性とすれば、本來不淨、惡人なり。

○我が小我、常に地獄、餓鬼、畜生の業を積むなり、この業により流轉し、苦より苦に闇より闇に轉ずなり。

○小我、煩惱を生じ煩惱より菩提心を發す、恰も泥中より白蓮華を生ずるが如し。

○眞我、萬法を生じ萬法は一法より生ず、一法とは佛心これなり、佛心とは大慈悲心。

○煩惱、由來、佛心より發る所なり、是れ實に菩提心を發さしめんが爲なり。

○我が念佛も佛のおはからいで申す念佛。

○菩提心を發せしもの、煩惱を菩提に轉ず、煩惱いよく盛んにして、菩提更に強し。

○小我、眞我が入り、小我、轉じて眞我現はれ、眞我、小我に入り、眞我、轉じて小我に現はる、一心專念小我轉じて、小我と眞我、一如なる時果滿覺王獨了々是れ入佛。

○八億四千の念々もみな佛心となる時は、死にたぐない小我心、こゝに一切を生き生かす慈悲の觀音。よくなりたいた小我心、こゝに一切の無明を照す智慧の勢至。

○唱ふるみ名の念々に不淨惡人の我が身の中から佛があらはれ給ひてぞ、佛が我が身になり給ふ。

○諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意。天然自然、南無阿彌陀佛のかさなりて、季きて我が身を觀ずれば、價值もないよな澁柿が、甘柿となり價值つく。

○惡人の我れが往き佛の我れが還る。往相還相これ一相。

○世尊、無上正覺を得 歩いて、御下山の路是れ御上山の路。

○宇宙萬法これ一味。往相還相これ一路。人道菩薩道佛道これ一道。向上の生活は價値の生活、この生活、是れ白道。

○客來りて曰く、眞我、我れに存せりと信せずと、答曰、汝の認識の範圍を出でよ、無限の世界は汝の認識の外にあるなり、觀念を破れ、觀念の念にあらざる念佛により、汝の心眼開くれば愕然として自性を見む。

○又曰、佛を見るを得たらば念佛せむと、答曰、汝、自己を發見せよ、自己を發見せば佛を見るを得む、客曰、既に自己を發見せりと思ふ、答曰、咄！汝！罪惡生死の凡夫奴、客怒る、答曰、汝いぞ我が言に怒れるは未だ汝の自己を發見せざる確實なる證據なり。

○君よ、今迄君が生きて來たのは眞實を知るの爲に生かされてゐるのだ、君よ人よ生れて眞實を知り、眞に生くるにあらざれば君の人生は一場の惡夢にすぎないのだ。

○庭の草木の育つを見れば、美しゆならう、よい 菩提心を發さず、道心なく念佛なし、是れ彼等、實を結ばと延びてゆく、何故に人間は佛の如く 業障甚深なるによるか、又我驕慢、懈怠なるによるか、眞に生きやうと願はないのであらうか。餓鬼は己れの餓鬼たる事を思はず、畜生は己れの畜生たるを思はない、人は己れの人たるを思はず遂に

吾朋便り

◎南無阿彌陀佛

今井善吉様より

唐澤山御別時の際には一方ならぬ御世話様に成りまして御禮の申様も御座いません。

始めて眞實自覺の世界に生れさせて戴きました。私は餘りに力弱い赤子であります單なる自己と云ふ者の力弱さを痛切に感じました。

然し我も又如來の子である如來の聖寵に依りて如來の完さが如

く我も又完き事が、出来ると思

ちて絶對如來に一心に歸命する

時の力強さあゝ私は多年念じて

居りました眞生の自覺を得さし

て戴きました、あゝ、

此の喜び此の力……何んと云ふ

喜びの世界でせう何んと云ふ力

の世界でせう。

私が佛子である如く一切ことごとく佛子ならざるはない。然し眞實佛子たる自覺を得たる者幾人哉有らう、餘り少人數なるに氣附きます。

其時私は單なる自己の喜びに止

まらずしてすべてに此の自覺此

の喜びを別けさしてやりたいと

念する時今迄の様にちつとして

居られませんか。私は猛然として

立ちます。先づ手初めに家内の

者を信仰に入れさせたいと存じます。

嗚呼 我等の敬愛する御上人よ

我等の傳道の爲に越後へも御出

で下さる様に御願ひ致します。

私許りでなく越後でも幾人御上人の御來越を一日千秋の思いで御待ち申して居るでせう。

私は御念佛の中に我何を成す可

きかを考へる時私は

一、自己を完成する事

雲の姿、湖の色、山の景色、目に觸るゝもの耳に響くもの仙郷といはんよりは極樂淨土其の儘の樂土に合掌の一週日は何として文筆に親しみ少き私には逆も形容の致様もない有難さでありました。過去の思出に耽らんよりは今十一ヶ月の後に再びなつかしの阿彌陀寺に上人の御法話を而も一家九人打揃ふて拜聽し得る喜びを一圖に樂しみ居ります。父も御蔭様にて歸來非常に御慈悲を喜びまして、毎月二回の佛教座談會の宣傳ビラを私に代つて配つて下れます。來年は隱居の方も兩人共是非とも御縁に逢せて頂く申と樂しみ居ります。さすれば私の宿願通り子供五人に私夫婦合計九人にて法悦に逢せて頂く機會が到來致します

して斯様な喜びは御座いませ

ん。十一ヶ月は中々待ち遠いで

すが併し初めて三昧會に出して

頂くなら最初丈は何卒して唐

澤にてと思ふて居ります。

◎信州 藤井實應様より

無事御安着の事とお察し申しま

す。唐澤御別時には大に自覺せ

しめられ力つけられました。厚

く御禮申上げます。其後愈々念

佛修養に務めて居ります、小さ

い乍らも出来る丈けの本務をつ

くしたいと存じます。

今後の御教導を偏に御願申上ま

す。乍末筆奥様にもよろしく御

傳へ下さい。

◎土屋觀道

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

二、自己の理想の遠大なる事
三、一家全體信仰に入れる事
以上を土臺としてこそ始めて力一杯の我理想實現が成ると思つ時グヅ／＼して居られません。以上が私の現在の信念であります。

唐澤山で御世話に成りました道友皆様にも御知らせしたいと存じますから眞生に御序の節御戴せ下さい。

皆様に宜敷く御芳聲下さい合掌

◎大垣 淺野寅次郎様より

南無阿彌陀佛 上人様先月末唐澤山にて御別れ申してより早一ヶ月に垂んとし居ります。あの懐しい集ひ日ねもす鳥の聲、さては目白とやらん頬白とやらん名も知らぬ鳥の囀る聲々に慰められつゝ千變萬化極りなき

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

七月三十一日に富士登山から歸京した私は其の後引つゝき健康を害して居りましたが、八月中

旬に先約をはたすべく越後の柏崎に寄せて頂きました。晝間は勉學、夜間だけ講話といふつもりでした。此の間見附にも原様渡邊様會田様と四人で今井喜吉様を訪ねました。近來暫く越後の土地を踏まなかつた私は久々のやうな氣がして北越の道友が一層に懐かしくてならない氣がしました。殊に今度柏崎の集りは許よりお互道友の集りではあります。青年實業家の集りでありまして、何れも眞生の中心に生きやうとする同志の集りでした。彼地の同志は數年ならずして縣下を中心に到る所に此の眞生の旗を掲げずにはおかないと勇んでゐられます。今私はこの一日から赤倉の温泉に暫く勉學を兼ね

た静養をつゝけてゐますが、これからの活動準備かと思へば身心共に一層蘇生した氣分であります。それに付けても各地の道友の旁々に對し、餘りに御無沙汰勝であります。皆様には御變りもありませんか。願くば之から秋の好季を利用して更に一層の眞生主義を高潮したいものではあります。尙道友の御通信や眞生誌への御投稿を歓迎します。

氣持、それを強いて言葉にすれば「沈黙の躍動」。働らかうと思はないで働らいて行く力。こんな氣持を経験してゐます。唐澤山の五日間の思出はどんなに私をして涙ぐまして呉れます事か、かつて経験せざりし廣やかな世界に呼覺して頂けました事に對し、心から上人に合掌さして貰ひます。今後共御導き下さいませ、末筆ながら師の御健康を御祈りさせて頂きます。

◎桑原和夫様より

合掌 南無阿彌陀佛

深い涙の催さるゝ日で有りま

す、しかもそれは言葉を超へた

深い悦びであります、黙つてゐ

て悦べる世界なのであります。

「沈黙の躍動」念佛の底に念々に

湧く力言葉に表現出来ない程な

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八番 眞生社
東京市芝區芝公園九十四號地九番
編輯兼 土屋 觀 道
發行人 東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷人 三井 清 次
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所 精進堂印刷所
東京芝區芝公園第十四號地九番
發行所 眞生社

(大正十四年八月十三日)
第三種 郵便物認可

大正十五年九月十六日印刷納本
大正十五年九月十七日發行

(毎月一圓十二日發行)第五卷第七號(本誌臨時十七日發行)